

第6章

フィジー諸島の都市形成とフィジー系住民社会

はじめに

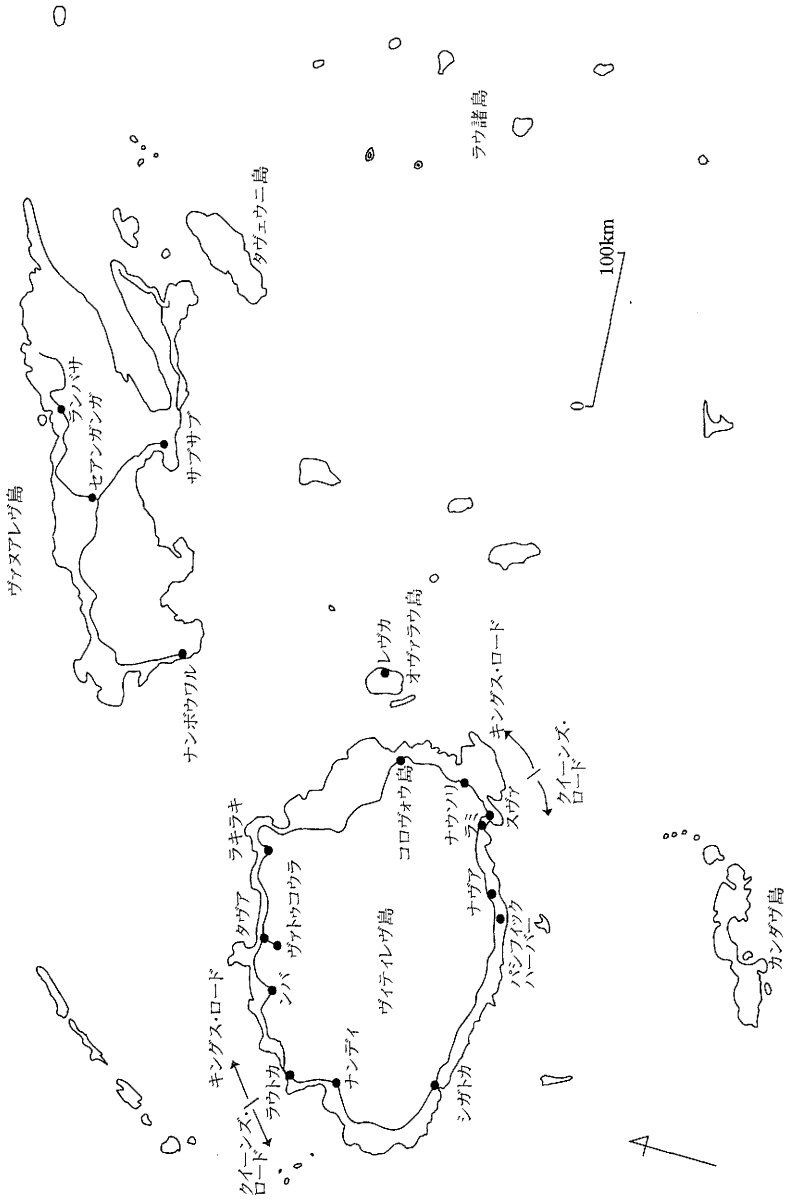
フィジー諸島においても都市化の進行は疑うべくもない潮流であり、1996年には都市人口は46.4%に達した。村落における共同体を基礎とした社会システムを保持してきたフィジー系住民たちの半数近くが、こうした伝統的共同体とは切り離された空間に生活の基盤を移しているということは、彼らの社会にとってどのような意味を持つのだろうか。

本章では、フィジー諸島における都市形成過程を振り返り、特にフィジー諸島最大の都市であり、フィジー系住民たちの主たる移住先である首都スヴァに焦点をあてて、フィジー系都市住民がいかなる形で形成されたのかを歴史的に追う中で、フィジー系都市住民の新しいアイデンティティについて検討してみたい。

第1節 フィジー諸島の都市形成

フィジー諸島には現在、二つの市 (city) と九つの町 (town) が存在している (図1および表1参照)。これらの市町には、選挙による地方議会議員と、その中から選ばれる首長が存在し、各自自治体はマーケットなどの公共施設の

図1 フィジー諸島全体地図



(出所) 筆者作成。

表1 フィジー諸島の都市・未編入都市と人口の推移

(単位:人)

	市町制定年	1996年	1986年	1976年	1966年	1956年	1946年	1936年	1921年	1911年	1901年
【市 (city)】											
スヴァ	1881年	167,975	141,273	117,829	80,269	37,371	25,409	15,522	12,982	7,788	4,695
ラウトカ(ナモリ)	1929年	43,274	39,057	28,847	21,221	7,420	?	1,713			
【町 (town)】											
ナンディ	1946年	30,884	15,220	12,995	11,351	1,653	?				
ナウソリ	1931年	21,617	13,982	12,821	9,619	1,105	?	826			
ランバサ	1939年	24,095	16,537	12,956	9,716	1,595	?	652			
ンバ	1939年	14,716	10,260	9,173	8,309	2,381	?				
シガトカ	1959年	7,862	4,730	3,635	2,339	1,475	?				
レヅカ	1878年	3,746	2,895	2,764	3,000	1,535	?	1,083		1,421	
サヴサヴ	1969年	4,970	2,872	2,295	1,861	315					
ラミ	1977年	18,928	16,707								
タヴァ	1992年	2,419	2,227	2,144	1,994	790		202			
【未編入都市 (unincorporated town)】											
ヴァトゥコウラ		7,079	4,789	6,425	4,993	5,045					
ラキラキ		4,836	3,361	3,755	2,708	185					
ナヴァ		4,183	2,775	2,568	1,595	633					
コロヴォウ		318	340	290	329	257					
パシフィックハーバー		1,607									
ナンボウワル		592									
セアンガンガ		394									
都市人口総計		359,495	277,025	218,495	159,259	63,309	39,527	19,997	12,982	9,209	4,695
総人口		775,077	715,375	588,068	476,727	345,737	259,638	198,379	157,266	139,541	120,124
都市人口比率(%)		46.4	38.7	37.2	33.4	18.3	15.2	10.1	8.3	6.6	3.9

(注) (1) ここに掲げた各都市の人口は市町内と各都市周縁部の人口を加えたものである。

(2) ラミの人口は1976年国勢調査まではスヴァに含まれている。

(出所) Colony of Fiji [1936], Whitelaw [1966], Bloomfield [1967], Chandra [1980]; [1996], Bureau of Statistics [1998b] などより筆者作成。

維持・運営や、土地利用などに関する行政を司っている。また国勢調査委員会は、こうした公的な自治体組織を有する市町の他に、行政区分上は未だ市町として指定されていないいくつかの地域を「未編入都市」(unincorporated town)として取り扱い、国勢調査においてこれを都市部として分類している。ここではまず、これらの都市地域がどのように形成されたかを概観し、

その特徴について考察する。

1. レヴカ

フィジー諸島で最初に形成された町は、オヴァラウ島の東岸に位置する港町、レヴカである。19世紀に白人たちの太平洋進出が本格化する過程で、19世紀後半には西太平洋地域の交易の中心として、レヴカは白人定住者たちによって繁栄を謳歌した。1870年代には、帆船で港は溢れかえり、3軒のホテルと数多くのパブが営業し、イングランド、スコットランド、アイルランド、ドイツなどの商人たちが多数出入りしていた。

しかしながら、背後に峻険な山が迫っており、周囲に市街を拡大することが困難なことから、白人たちは早くからレヴカに代わる港湾都市の建設を視野に入れていた。1861年には新たな良港建設を目的にスヴァ、ナンディ、ガロア（カンダヴ島）の調査が行われ、この中ではスヴァが最適地であるとの報告が出されている（Schutz [1978] p.8）。

1874年にフィジー諸島がイギリスの植民地に編入されると、植民地政府は1882年に現在の首都であるスヴァに行政政府を移転した。これによって白人商人たちも次々とスヴァに移動し、レヴカは交易の中心地としての機能も失っていった。最後まで残っていたドイツ商人たちが第一次世界大戦によって撤退すると、その後はパイナップル工場建設の試みなどはあったものの、小規模なコプラ取引が行われるだけの小さな港町となった。しかし1964年に日本企業によって漁業施設が建設され、1970年代にマグロの缶詰工場が操業を開始したことによって、再び町は活気づいた。缶詰工場の経営は必ずしも芳しいものではなく、日本企業が撤退して国営事業となって以降も、幾度となく操業がストップして政府の資金投入が行われている。しかしレヴカは現在もこの工場を中心に経済が成り立っているといつてよく、周辺の村落から移り住んだフィジー系住民たちを中心に、東部方面唯一の町として存在している。

2. スヴァ

スヴァは、ヴィティレヴ島南東にあるスヴァ半島の西岸に、良港を持つ首都兼港町として19世紀後半に建設され、20世紀を通じて拡大を続けている太平洋島嶼随一の町である。

この土地は、1868年にメルボルンの投資ブローカーであるポリネシア・カンパニーが、フィジー王を名乗るザコンバウから入手したものである。当時ザコンバウは、レヴカのアメリカ商人ウィリアムズ邸で1948年に発生した火災の賠償金をアメリカ政府から執拗に要求されており、これを知ったポリネシア・カンパニーは、20万エーカーの土地とフィジー諸島における貿易権や金融権などの諸権利と引き替えに、この賠償金の肩代わりを申し出た。アメリカの砲艦外交によって進退窮まっていたザコンバウはこれを受諾し、その結果スヴァ半島一帯の土地がポリネシア・カンパニーに譲渡された。

ポリネシア・カンパニーはスヴァの土地取得後、1870年にこれを白人開拓者に分譲した。初期開拓者は当時将来性が見込まれていたサトウキビの生産事業を計画し、現在の市街中心地の一角には工場の建設も行われた。しかしながら気候的にも土壌的にもこの地はサトウキビ生産に適していなかったため、結局収穫に至ることなくこの計画は失敗に終わった。そして1877年頃までには、土地の権利は開拓民からマクエワン・アンド・カンパニー社に渡っていた。土地を手に入れた同社のトムソンとレンウィックは、レヴカからスヴァに首都を移転するよう、植民地政府に対して熱心に運動を始めた。そして交渉の結果、植民地政府に土地の3分の2を無償譲渡することで、1879年、正式にスヴァへの首都移転が決定したのである。政府にとっては、取得地の中の不要な土地を民間人に再分譲することで首都建設資金の捻出ができる。一方会社側にとっても、首都における3分の1の土地の権利を持つ大地主になることは、絶好のビジネスチャンスだったわけである。

こうしたスヴァ黎明期の一連の経緯は、その後の都市形成過程を考える上

で見逃すことのできない点である。フィジーを含めて太平洋島嶼地域の多くの国では、複雑で曖昧な権利関係から、土地問題はしばしば大きな争いに発展するが、スヴァの場合、上記経緯によりその中心部はすべて国有地ないし自由地となったのである。スヴァはそのスタートから、近代都市として成長するために有利な条件を確保していたのである¹¹⁾。

さて、植民地政府は、1880年に一部国有地を民間人に売却して商人たちの移住環境を整えた上で、1882年には正式に首都移転を行った。以後フィジー諸島の首都としてスヴァが拡大を続ける過程については節を改めて詳述する。なお、スヴァの拡大過程において、当初はその周縁部に含まれていたラムが、1977年に正式にタウンに指定され、スヴァとは行政区分上分離されて独立した町となった。

3. 砂糖生産の開始とシュガータウンの形成

1850年代後半から1860年代初頭にかけてコブラ貿易が大きく拡大したフィジー諸島は、広大な土地を有し、またメラネシア地域に広がるマラリアの心配もないことから、白人入植者にとっては格好の新天地であった。おりしも1861年にアメリカで南北戦争が勃発したことにより綿花供給が激減して価格が急騰し、フィジー諸島では1860年代に白人入植者の手によって綿花の栽培が開始される。当時の資料によると、フィジー諸島の木綿輸出は、1864年に3000ポンド、1865年9200ポンド、1866年1万9800ポンド、1867年に3万4000ポンドと急速に拡大している (Derrick [1946] p.160)。しかしながら南北戦争終了後にアメリカの綿花生産が回復すると木綿相場は急落してしまう。このためフィジー諸島の植民者たちは新たな産品として砂糖生産を手がけ始めたのである。

フィジー諸島で最初に事業目的でサトウキビの生産が行われたのは1862年のことであった。1880年にレワ川一帯の肥沃な土地を1000エーカーほど入手したコロニアル・シュガー・レファイナリー社 (CSR) は、収穫されたサト

ウキビを製糖するための工場を、川沿いで水路の便のよいナウソリに建設した。以後サトウキビの生産は、フィジー諸島の一大産業として発展を続け、インドから多くのサトウキビ農民が導入されるとともに、各要衝に工場が建設されてゆくことになる。1880年代にはペナン（ラキラキ）、ララワイ（ンバ）、ナヴァに、1890年代にはランバサに、そして1903年にはラウトカにと、次々に建設された砂糖工場は、徐々にその周囲に町を形成してゆく。工場を核としてヨーロッパ人の住居が確保され、工場の周囲には労働者の宿舎が建設され、更に必要物資を商う常設店が並び始める。いずれの地も物流に支障なきよう海ないし大きな川に面しており、その結果周辺のフィジー系村落から交易に訪れる者も出はじめる。こうして砂糖工場の周辺には、次第に新しい市街地が形成されていった。

ところで砂糖産業発展の過程で忘れてはならないことに、運搬用鉄道の建設事業がある。当初人馬と海上（水上）輸送に頼っていたサトウキビの集荷は、これに代わるものとしてサトウキビ鉄道による輸送が選択され、CSRは早くも1914年にはシガトカからヴィティレヴ島北西側を通過してタヴァまでの区間にレールを敷設した。そしてこの過程で新たな物資集積地として、タヴァとシガトカもまた町を形成、発展させることになった。

19世紀末から20世紀初頭にかけて急速に拡大を続けた砂糖産業は、一時はタヴェウニ島やマゴ島（ラウ諸島）などでも工場が建設され、多くの事業者が競い合う活況を見せた。しかし業績の上がらない会社は次第に併合・整理されていき、最終的にはCSRに一本化された⁽²⁾。またその過程で、湿潤なヴィティレヴ島東部はサトウキビ生産には必ずしも適していないことが明らかになり、1959年までにはナヴァとナウソリの工場が閉鎖されて、4工場体制（ラウトカ、ランバサ、ンバ、ラキラキ）となって現在に至っている。

ナヴァはナヴァ川の河口付近にあって、内陸の村々との交通の要衝としての機能も持っていたため、この地は工場閉鎖以降も周辺一帯の木材、畜産、農作物の集積地として町が存続している。またナウソリには、レワ川を挟んで対岸のダヴィレヴに全寮制の学校が開設されており、1938年までにはバタ

一工場と精米工場も操業を始めていた。さらに町はずれにはスヴァを中心とするヴィティレヴ島東部の空路の起点として小型飛行場も建設され、砂糖工場閉鎖後もレワ川一帯の生産物を集めるとともに、拡大を続けるスヴァのベッドタウンとして現在も発展を続けている。

4. その他の市街の形成

乾燥地であるヴィティレヴ島北西部とヴァヌアレヴ島北部を中心に砂糖産業が発展する一方で、サトウキビ生産には適さないヴァヌアレヴ島南東部、タヴェウニ島、ラウ諸島などのフィジー諸島東部一帯では、他の太平洋島嶼同様、コブラの生産も盛んに行われた。こうした中でコブラ工場が建設されたヴァヌアレヴ島南部では、その積み出し港としてサヴサヴに市街が形成されていった。

1932年、ヴィティレヴ島北部のヴァトゥコウラで金の採掘が始まると、大量の採掘労働者たちが鉱夫としてこの鉱山に集められた。金の生産は順調に拡大し、1932年に輸出総額の1%だったものが、1940年には40%に達し、一時的ではあるが1941年と1945年には砂糖を抜くほどの勢いを見せている。こうした採掘活動の隆盛に伴って、ヴァトゥコウラの人口はみるみるうちに膨れあがり、操業開始5年後にはフィジー諸島第3の人口集中地となった。ヴァトゥコウラで採掘労働者として働くのは多くがフィジー系とロトゥマ系⁽³⁾で、1939年の資料では1493人中フィジー系が1171人を占めている。その後は何度か訪れた枯渇の危機を新鉱脈の発見などで乗り切って現在に至っているが、エンペラー・ゴールド・マイン社という一私企業の城下町であり、いずれは訪れる閉山後には町そのものの存続が危ぶまれたこともあって、ヴァトゥコウラは現在に至るまで町制が敷かれておらず、行政および商業機能は近隣のタヴァアがその任を果たしている。

コロヴォウは、直訳すると「新しい町」という意味で、第一次世界大戦後に退役したヨーロッパ人たちが新たに乗り出した自営農場の中心地として形

成された。メインストリート沿いに100メートルほどの街が形成され、キングス・ロードの「宿場町」的な小さな町である。

フィジー諸島の主要都市で最後に形成されたのはナンディである。サトウキビ畑の広がるこの地に、太平洋戦争の勃発によって軍用の滑走路が建設され、その周囲にアメリカ軍が駐留したことから、ナンディ川の川沿いに形成されたナンディの町は急速に発展した。戦後はナンディ空港がフィジー諸島の空の玄関となり、近年の観光客の増加によって繁栄を謳歌している。人口増加率も高く、ナンディ町議会はナンディの市制化を中央政府に申請中である。

以上が1986年国勢調査までの市・町および「未編入都市」だが、これに加えて1996年国勢調査では、新たに三つの地域を「未編入都市」カテゴリーに加えている。

まずパシフィックハーバーは、1970年代後半から観光産業の一大拠点として開発が進められた地域で、当初は8万人規模の大都市になることまで想定されていたが、必ずしも開発は予定通り進まず、観光客向けの文化センターやゴルフ場、ホテルなどが点在しているばかりである。しかしながら、スヴァアから50キロメートルという好立地条件にあって、観光客向けというよりはむしろスヴァア住民の郊外保養地として、徐々に人口も増加している。またセアンガンガはヴァヌアレヴ島のサトウキビ地帯で近年開発された大規模な農業地の中心地として、ナンボウワルは同じくヴァヌアレヴ島の西端にあって、ヴィティレヴ島とを結ぶフェリーの発着点として徐々に発展を見せている市街地域である。

5. フィジー諸島における都市

以上、簡単にフィジー諸島各都市の形成過程を振り返ってみたが、フィジー諸島の特徴のひとつは、太平洋の多くの島々とは異なる都市形成パターンが見られるということである。フィジー諸島の都市問題を研究している

A・C・ウォルシュは、フィジー諸島の都市形成パターンを「政府町」(Government Town)と「会社町」(Company Town)という形で分類し、フィジー諸島の各市町をヨーロッパ人による行政および商業の中心地として発展したものと、砂糖を主とする産業の中心地として発展したものとに大別している(Walsh [1977] p.2)が、太平洋の島々の都市はその前者のケースがほとんどである。これに比べて砂糖産業という太平洋島嶼では特殊な産業が発展したフィジー諸島においては、一群の「シュガータウン」が形成された。砂糖産業形成の過程で移住してきたインド系住民は、現在でもその多くがサトウキビ生産に従事しているが、彼らはフィジー諸島上陸当初から、自給自足経済ではなく貨幣経済に包摂されていた。農村にあつて相互扶助を基本とするフィジー系に比べて、個人主義的性格が強く商品作物の生産を生活の基礎としているインド系は、消費者として、また小商人として、初期の都市経済の重要な担い手であり、その存在は都市形成の重要なファクターであつた。

第二に指摘しておかねばならないのは、こうしたシュガータウンに代表されるように、フィジー諸島は首都以外にも、各地に点々と都市化された空間を持つということである。太平洋の多くの島国では、通常首都に人口が集中し、その他にはせいぜい小規模な町が一つか二つしかないケースがほとんどである。これに対してフィジー諸島では、17万人近い巨大な人口を抱える首都スヴァ以外にも、ラウトカ(4万3000人)、ナンディ(3万1000人)、ランバサ(2万4000人)など、都市周縁部を含めると万単位の人口を擁する都市が七つもあるのである。もちろんフィジー諸島が太平洋島嶼地域の中では人口規模が大きいこともその大きな原因のひとつだが、域内において多都市化したケースは、アメリカに併合されたハワイを除くと、フィジー諸島のほかに400万人以上の人口を持つパプアニューギニアしか見あたらない。そしてこのように多都市化したことによって、たとえばサモアでは、出自村落、アピア(首都)、海外という三つの選択肢の中から居住地を選択するしかないのに対して、フィジー諸島においては、国内の都市間移動というもう一つの道ができあがつたのである。

国内都市間の移動という点では、とりわけヴィティレヴ島の東西（スヴァとナンディおよびラウトカ）の間で活発である。行政の中心スヴァと、観光と砂糖産業を持つナンディ、ラウトカとでは経済基盤が異なるため、その時々雇用状況によって短期的な移動も行われる。筆者が本研究会の中間報告で取り上げたスヴァ在住のフィジー系都市住民の一家においても、都市二世である長男（1956年生まれ）は1972年にナンディに移り住み、次女（1967年生まれ）は1997年に内縁の夫から逃れるために、また都市三世である次男の娘（1978年生まれ）は1998年に求職のために、それぞれナンディに移住している（そして別々に暮らしている）。これに対して、結婚後2度にわたって村落部に移り住んだ同じく都市生まれの長女（1964年生まれ）は、2度とも田舎の生活に耐えきれずにスヴァに舞い戻っている（小川 [1999] pp.116-120）。

この事例は、村落社会の伝統的生活に不慣れで、必ずしも出自村落との人的関係も濃厚とはいえなくなった都市生まれのフィジー系住民が、現住地からの移動を考える場合、他の都市部へ移動することの方が、出自村落に身を寄せる以上に容易で快適な生活環境を確保できるということを端的に示している。そして容易に移動できる都市がこのように国内に選択肢として用意されているのがフィジー諸島の特徴なのである。これは都市と農村の紐帯をより希薄にする一つの要因になっているのではないだろうか。

さて、ではこうして形成されたフィジー諸島の町が次第に発展してゆく中で、村落にあって伝統的な共同体生活を営んできたフィジー系住民たちはどのようにこれに包摂されていったのであろうか。次節以降では、フィジー諸島最大の都市であるスヴァの都市化と、そこに住むフィジー系住民の姿に焦点をあて、フィジー系都市住民社会の現状について考察を行う。

第2節 スヴァの都市化とフィジー系都市住民社会の形成

1. 初期のスヴァ

首都が移転してきた当初のスヴァは、現在の市街地を中心に、1マイル四方の区域を行政区画とし、埠頭（現在の中央郵便局のあたり）から海に平行に伸びるトムソン・ストリートとレンウィック・ロードの二つの通りに商店やオフィスが並ぶ小さな町に過ぎなかった（図2）。やがて白人街と行政府は、二つの通りが合流して南に走るヴィクトリア・パレード沿いに南に延びて、この一帯に瀟洒でコロニアルな町並みを形成する。またスヴァ半島の南西部は、白人たちの住宅街となった。白人たちは行政のほか、海運、金融などの大手ビジネスを手がけ、たとえば卸売業は太平洋戦争に至るまで、すべて白人たちの手に独占されていた。白人たちは、直接庶民に接する商売はしなかったのである（Whitelaw [1966] p.129）。

一方労働者層は、当初ヌンブカロウ川を越えて市街地の東側の坂の上にあるトゥーラック地区に住居を構え、やがてそこから港に通じる道に、インド系や中国系の商人たちが労働者向けの小規模な店を並べ始めた。現在のマーク・ストリートの商店街である。また1900年代初めにマングローブ林を切り開いて、ヌンブカロウ川沿いにつくられたカミング・ストリートは、全長150メートルほどの通りに、売春宿からカヴァ屋まであらゆる享楽が揃う街として、船乗りや訪問客、庶民たちの集う繁華街を形成していった。1923年にカミング・ストリートで大火災が発生したが、その際に消失した店舗は仕立屋9、飲食店18を含む45店舗に及んだという（Gravelle [1979] p.31）。この記録からも、当時のカミング・ストリートが、すでに店舗が立ち並ぶ一大繁華街だったことが推察できる。

中心部の北側には、やがて第一次世界大戦の時期にキングス・ワーフが完成して港が移動し、港から北に向かって海岸沿いに形成されたワルベイ以北

図2 スヴァ中心部



(出所) 筆者作成。

表2 スヴァの民族グループ別人口 (1901~1946年)

(単位：人)

	1901年	1911年	1921年	1936年	1946年
ヨーロッパ系	1,073	?	1,753	1,863	2,299
ヨーロッパ人との混血系	176	?	584	933	1,744
フィジー系	701	?	1,981	3,471	6,406
インド系	1,728	?	7,246	7,821	12,729
中国系		?	343	494	871
ポリネシア系	826	?	569	930	730
その他	191	?	506	10	630
合計	4,695	7,788	12,982	15,522	25,409

(注) (1) 1911年の民族グループ別数値は不明。

(2) 1901年の中国系はその他の中に含まれる。

(3) 「ポリネシア系」については、本文注(4)を参照せよ。

(出所) Colony of Fiji [1936], Whitelaw [1966], Bloomfield [1967] より筆者作成。

の埋立地には、工場街が形成されていった。

このようにスヴァの町は、初期段階からある程度の棲み分けがなされていたわけだが、では都市を担う住民たちは誰だったのだろうか。表2は1946年までのスヴァの民族グループ別人口を示したものだが、これを見ると、20世紀に入った頃には、すでにインド系がヨーロッパ系を数の上では凌駕し、その後も一貫して最大の民族集団の位置を占めていたことがわかる。またポリネシア系⁽⁴⁾や、徐々に増加する混血者も、早い段階から高い割合を占めている。これに対してフィジー系は、その人口数に比べてスヴァへの進出の動きは鈍く、1921年に至ってもヨーロッパ人の人口をわずかに上回る程度である。この要因については後述するが、この時期のフィジー系の都市人口は、フィジー系全体の人口から見ると極めて低い割合に終始しているのである。

さて、都市人口の拡大によって、最大民族グループであるインド系を中心に、居住地域も次第にスヴァ市街の周辺に広がってゆく。その中には市街地周辺の国有地の斜面などを不法占拠してつくった掘っ建て小屋も少なくなく、住環境は決して良好とはいえないものも多く見られた。1920年代頃から居住区が拡大されたサンプラ地区もその中の一つである。とはいえ、都市周辺

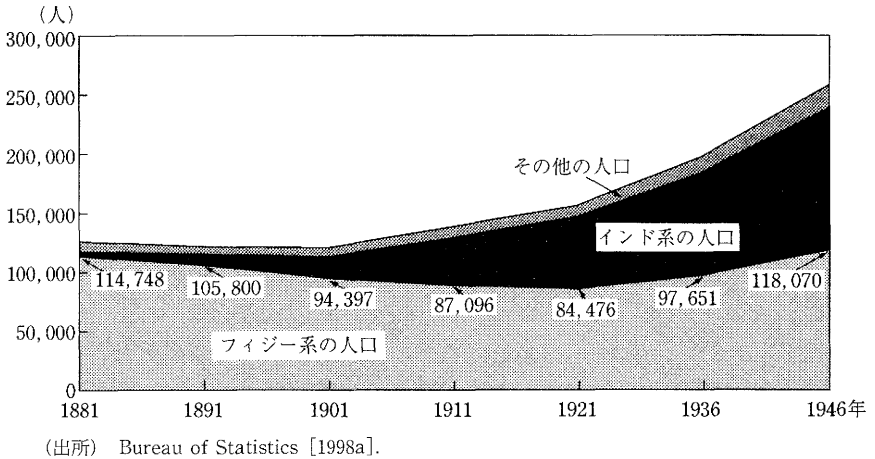
にはまだまだ未開発の平地があり、サマンブラは1930年代末には依然として牧草地の広がる長閑な一帯だったという (Vakatora [1998] pp.7-9)。

こうして徐々に拡大を続けたスヴァは、太平洋戦争の始まる直前の1938年までには、中心部の南側に博物館、図書館、植物園、競技場、公民館などの文化施設も整備された都市空間へと発展していった。また鼈甲細工や金銀細工職人も定住し、家具、建具、縫製、ビスケット、石鹼、炭酸水、搾油などの製造工場や、製材所、造船所、印刷所、機械修理工場といった軽工業も発達し (Derrick [1938] p.167)、それにともなって、スヴァにおける雇用機会も拡大を続けていったのである。

2. フィジー系住民のスヴァへの進出

都市形成の初期段階において、フィジー系住民が村を離れて都市に移住することは、スヴァに限らずそれほど多いことではなかった。その理由としては、まず麻疹やインフルエンザなどの伝染病の流行により、国勢調査が始まった1881年から1936年に至るまで、フィジー系の人口が一貫して減少を続けていたことがあげられる (図3参照)。すなわち村落社会内部における人口の減少によって、土地や食糧の不足といった問題は生じておらず、フィジー系社会内部には社会的経済的な意味で農村部から都市部への人口移動を促す圧力に欠けていたのである。そして、こうした状況の中で、村落社会の伝統的な指導者たちも、概して人々が村を離れることを好まなかった。植民地時代に医療行政に従事し、後にスヴァ市長やSPC事務総長を歴任するマズ・サラト (1915-1990) はその生い立ちの中で、「6人の兄弟のうち4人は子供の頃に死亡し、3歳の時に父親も亡くなった。叔父に従って島を離れて学校へ行こうとすると、母親は男手がなくなると強く難色を示した」とし、「このような感覚は当時の大人たちに一般的なことであった」と記している (Kiste [1998] pp.3-5)。こうした状況下で植民地政府はフィジー系村落社会の保護政策を採っており、村落を離れるためには酋長の許可を得なければな

図3 フィジー系住民の人口推移 (1881~1946年)



らなかったことも、移住を抑制する効果があった。

また伝統的に血縁による強固な村落社会を形成し、周囲に都市生活を経験した者もない中で、フィジー系住民にとって都市は異次元の世界であり、そこに移り住むということには心理的な抵抗感があったことも考えられる。19世紀、さかんに周辺諸島から労働者をリクルートし、ついにはインドからサトウキビ農民を大量に導入するに至ったのも、フィジー系住民が村を離れることを好まなかったことがそもそもの原因であった。加えて交通網が未発達で、移動がそれほど容易ではなかったことも、都市移住を妨げた要因だったといえよう。

こうした中で、村落周辺に現金就労機会が発生した場合のみ、短期的にそれに従事するというのが、19世紀から20世紀前半にかけてのフィジー系住民の一般的就労パターンであった。スヴァ周辺の場合でいうと、レワ川下流流域とナウソリ周辺に、周辺の村落民が荷役人夫として労働をしたことがその始まりであり、それはやがてスヴァの港湾労働者や海運水夫、建設労働者と

しての需要にも応じる契機となる。そして1920年代になると、レワ地域を中心に、少しずつ村を離れて都市に働きに出る者もではじめたのである。しかしながら太平洋戦争が始まるまでは、都市に住むフィジー系住民は、あくまで就学生や短期労働者が主流であり、恒久的な住居を構える者はほとんどいなかった (Walsh [1978] p.175)。

3. フィジー系都市集落の形成

フィジー系住民の都市定住を促す大きな契機となったのは、太平洋戦争であった。戦争景気とでもいうべき労働需要の増加と義勇兵の募集は、多くのフィジー系住民たちに村落社会とは異なる新しい世界を見聞し、経験させる契機となった。おりしも1921年から始まったヴィティレヴ島周回道路の建設が1937年のナウソリ橋の完成によって完工し、この時期には村落からの移動が飛躍的に容易になった。また、1930年代にヴァトッコウラの鉱山が開山し、この労働者として村を離れて働きに出るフィジー系住民が多数発生したことも、村落社会から外に出る心理的ハードルを低くした点としてあげることができよう。都市部での雇用増加が直接的な理由としても、人口の増加も含めて、フィジー系住民の都市進出を促進する様々な条件がこのころまでに達成されていたのである。

戦後も引き続き経済的に活況が続く中で、都市部では恒常的な人手不足があり、フィジー系住民たちは次々と都市部に進出するとともに、その多くがそこに住居を構えだした。それまでトゥーラックの仮住まいや雇用主にあてがわれた住居に暮らしていたフィジー系住民たちは、その数を増やす中でこうした都市部の既存のスペースに収まりきらず、スヴァ内外の国有地を不法占拠して集落を形成していった。たとえば1940年代に拡大したナウルヴァトゥ、1950年代に拡大したワルベイなど、中心部から北に位置する低地・斜面地帯、そして街の東側の丘を越えた先のライワイー帯には、フィジー系の集落がいくつも形成された。また少し時代が下ると、ナンブア、ンラインバ、

ナセセ、ヴァンガサウ、カウニクイラなどのスヴァ周辺の地域にもこうした集落がつくられた。無秩序に建てられた粗末な住居群は、都市スクワッターの先駆けともいえるものであり、当然のことながら電気や水道などの設備もないところが大半であった。

こうしたフィジー系都市居住者の集落は、基本的には出身地域をベースとしたものであった。たとえば上記ナウルヴァトゥの集落は、もともとヴィティレヴ島北東部のラ地方出身者が集住したものである。またライワイ地区一帯には、ロマイヴィティ地方、カンダヴ地方、レワ地方の三つの出身地ごとに集落が形成されていた。そして上記以外の地域の出身者は、この三つの中から、姻族関係があるとか、言語的に近いといったような、何らかの繋がりのある集落に身を寄せることが多かった。集落内部では、各地方の伝統的指導者層が集団のリーダーシップをとることが多く、それぞれ集落ごとに自治組織を形成して、水道代金の徴収や教会建設などのコミュニティ活動も行っていった。

ところで、後述する住宅公社の政策と対比する上で興味深いのは、1952年の台風によって家を失ったフィジー系都市住民に対して政府がとった施策である。植民地政府は、スヴァ郊外のナンブア地区の国有地に人工的に村落を建設して、そこに被災者たちを移住させた。このナンブア集落は、都市型村落 (urban village) として、当時行政官でもあったラトゥ・エペリ・ガニラウをそのトップに戴き、通常の村落と同様の自治組織も形成された。土地も家屋も政府の所有物であり、住民たちには相応の地代と家賃を支払うことを求めながらも、当時の行政府は、都市部に居住するフィジー系住民たちに対して、伝統的社会システムに倣った形で、いわば疑似村落を提供しようとしたのである。

こうした形での住宅提供は、実はそれ以前にも1940年代から教会組織などの手によって散発的に行われていた。その萌芽となるのは、市内の不法占拠住宅に劣悪な環境下で暮らすソロモン諸島出身者に対するもので、1941年、教会組織がスヴァ郊外のワイロクに土地を取得し、ここを整備して移住させ

たケースである。ソロモン諸島出身者に対しては、その後も1952年にカレカナ（ラム地区）とカウニクイラ（ナシヌ地区）への移住事業が行われている。また政府も、スヴァ半島南側のナセセ地区で宅地開発を行うため、そこに不法占拠集落を形成していたギルバート諸島とニューヘブリデス諸島出身者を、1955年にキングス・ロード沿いのナシヌ地区の国有地に移住させるという事業を行った。こうした特定の民族集団を特定の地域内に集中的に居住させるというやり方は、一方では民族分断的側面も垣間見えるものの、村落共同体にアイデンティティの基盤を持つ伝統を有する太平洋諸島民の社会構造を温存した形での事業であったといえる。

上述のナンブアにおける都市型村落の場合、チーフまでも半ば人工的につくり出してしまったわけだが、こうした手法を本格的な都市住宅政策を展開する前段階で政府が採用していたことは、その後の展開と対比する上で極めて興味深い。フィジー系住民（あるいは広く太平洋諸島出身者）は、あまねく村落共同体が基盤であり、フィジー系住民が都市部においても疑似村落を形成する必要性があるということを、無意識的に政府のような公的機関までもが認めていたのである。

4. 都市型生活基盤の萌芽

徐々に増加し始めたフィジー系都市定住者の多くは、このように伝統的社会システムを村落とは異質な都市という空間に移植する形で、生活の基盤形成を図った。しかしその集団の内実は、運命共同体的な村落社会とは異なり、諸個人各々がその集団の外に生活の糧を持つものであった。生活時間の多くを共有することが適わぬ都市という場においては、畢竟その共同体としての地位は相対的に弱化せざるを得ない。それは逆に薄れゆく紐帯を維持するために、これを人為的に補う必要性を生じさせることにもなる。

フィジー人社会学者の草分けであるナヤザカロウは、1961年に発表した論文において、当時のフィジー系都市住民社会の特徴として、(1)冠婚葬祭など

での血縁関係による相互扶助意識が村落部以上に強く、新たな都市的組織としての協同組合も出身地ごとに形成される傾向が強いこと、(2)しかしこうした中で、近所、職場、教会、単なる友達などという新しい形態の人間関係が自由に形成され、拡大されていること、(3)また労働組合などの都市型組織の中では、指導者の要件が家柄（酋長称号保持者）から学歴重視へと変化しつつあること、をあげているが（Nayacakalou [1961] pp.35-36）、「冠婚葬祭などでの血縁関係による相互扶助意識が村落部以上に強い」という指摘はまさに上記のような状況を照射するものである。ナヤザカロウの指摘は、都市という未知の空間に進出したフィジー系移住者たちが、伝統的な地縁・血縁関係を社会集団の財産として、それに大きく依存しつつ、その一方で新しい生活環境に対応した社会関係を受容し、都市生活に見合った独自の社会的紐帯を模索し、形成し始めている過渡的な状況を映し出している。そしてそんな彼らがフィジー系都市住民として個別の存在に解体される大きな契機となったのが、次節で述べる住宅公社による都市再開発の事業であった。

第3節 都市住宅政策の展開と住環境の変化

1. 住宅公社の設立と住宅供給プログラム

太平洋島嶼地域で都市問題が顕在化し、地域機関が取り組みを開始したのは、恐らく1962年のSPCによる各都市の調査と、それに続く1963年の担当者・専門家による会議が最初であろう。スヴァで行われたこの会議では、主に都市低所得者層に対する低コスト住宅の供給が議論された。

フィジー諸島においても、市街地周辺の不法占拠集落が戦後急速に拡大し、その劣悪な住環境の改善が行政課題として浮上し始めた。そして1950年代も半ばになると、都市人口の膨張による低所得者層の住宅問題は、もはやアドホック的な対応ではすまされなくなり、政府はこうした階層のための総合的

な住宅対策を講じる必要に迫られたのである。そしてその任務を担うべく、1955年に設立法が制定され、都市部に暮らし経済的に住宅取得が困難な中低所得者層向けに住宅供給を専門的に行う機関として、1958年から活動を開始したのが住宅公社（Housing Authority）であった。

住宅公社の事業目的は、都市在住の低所得者層の住環境改善であり、彼らが快適に暮らすための住宅取得を支援することであった。このためまず住宅公社が手がけたのは、都市部に恒久的な自家住宅の建設を希望する者に対して、資金の貸与を行う住宅ローンのプログラムであった。そしてこれと並行して、ザウンバティ、キノヤなど、スヴァからナウソリに向かうキングス・ロード沿いにある国有地を造成し、そこに道路、水道、電気などのインフラ整備を行って区画割りした上で、低所得者向けにこれを造成原価ベースでリースする事業を開始した。住宅公社は、この自家住宅建設のための資金供給と土地の提供という二つのプログラムを通じて、土地もまとまった自己資金もない都市在住の低所得者層が持ち家を取得し、都市生活の基盤を確立するとともに、劣悪な住環境からも脱出し、不法占拠地の解消にも通じると考えたのであった。住宅公社のこうした取り組みは、利用可能な国有地が限界になると、先住民保有地を一括して管理している先住民土地信託機構（Native Land Trust Board: NLTB）と交渉を行って、都市周辺の先住民保有地を長期リース契約によって借り受け、そこに宅地開発を行う事業へと発展した。また1971年からは、造成地に住宅公社自ら低コスト住宅を建設して、これを販売するプログラムもスタートさせていった。

しかしながらこれらプログラムを利用できるのは、「低所得者」の中でも一定水準以上の収入基盤を持つ者に限られていた。当然のことながら、住宅公社が持続的に融資を続けるためには、貸し付けた資金の回収が滞りなく行われることが前提であり、したがって資金貸付に際しては厳格な審査基準を満たすことが必要とされた。住宅公社は融資に際して、安定した定収入を持つことを条件としたのである。しかしながら不法占拠地に暮らす都市住民は、その多くが不安定な雇用条件下にあり、特にフィジー系は現金収入と自家裁

増植物による自給自足という二重経済の下で生活を成り立たせていた。当然のことながら、安定した定収入がある層は限られていたのである。また、住宅公社はローンが家計を圧迫しないよう、利子を含む月々の返済額を世帯主の収入の25%以下とすることを原則にしたため、定収入があっても所得水準の低い者は必ずしも融資を受けることができるとは限らなかったのである。

2. 低所得者向け集合住宅の建設

ではこうした定職を持たない階層に対して、住宅公社はどのような取り組みを行ったのだろうか。住宅公社の採用したプログラムは、集合住宅の建設であった。住宅公社は、設立間もない1960年代前半から、不法占拠集落に住む低所得者層向けに、安価で快適な住宅を供給するとして、集合住宅の建設を開始したのである。

この事業は、国有地に3～4階建ての鉄筋づくりの集合住宅を何棟も並べて建設し、劣悪な住環境に暮らしながらも持ち家取得のための経済的基盤のない都市住民に対して、低価格の賃貸住宅を提供したものである。住宅公社はこの住宅を、彼らの収入が安定し、持ち家が購入できる状態になるまでの一時的な住まいと位置づけ、極めて安い家賃を設定した。また家賃が収入の15%を超える場合には割引制度も設定するなど、福祉事業的色彩も持たせたものであった。この集合住宅は、スヴァではまず、ライワイとそれにつながるライワンガ地区に建設され、この過程でライワイ地区一帯に広がっていたフィジー系の集落は解体され、住民たちはこれら新築集合住宅や郊外の住宅公社造成地、そして近隣の不法占拠集落地区へと散っていった。

集合住宅の建設は、都市低所得者層の住環境改善を目的として行われたものである。しかしながらこのプログラムは、開始して10年もしないうちに、新たな社会問題の原因と指摘されることになってしまった。

その原因の第一は、上述の持ち家取得プログラムを利用できる、相対的に裕福な層が郊外の新規造成地に散ってゆく中で、経済的弱者のみを一定空間

に隔離したことである。しかもそれまでは曲がりなりにも自治組織を通じて住民コミュニティを保持していた居住者たちは、隔離された小さな空間にバラバラに居住させられたことによって、世帯単位に分断されてしまった。1世帯に充てられたスペースは30平方メートルほどで、団地形式であるために当然ながら世帯ごとのオープンスペースもない。フィジー系住民にとっては、村落から出てきた拡大家族を受け容れる十分なスペースがなく、各世帯の居住空間はおしなべて過密化を余儀なくされた。加えて、自家農園のための土地もない集合住宅暮らしは、彼らの伝統的な収入補助手段の喪失を意味した。フィジー系住民にとってこうした居住形態はそれまでの生活形態と明らかに異なるものであり、彼らは隔離された空間の中で小さな世帯ごとに個別に生き残ることを強いられた。しかも不法占拠集落住民が自家住宅を取得するためのステップとして想定されていたこの集合住宅は、新たに開発が進んだ郊外のキングス・ロード沿いのリース地よりも市街地に近く、しかも家賃はほとんど値上げがされなかったため、多くの住民たちはそのままこの集合住宅に居続けた。いや、居続けざるを得なかったといえるかもしれない。こうして人口約1万人に膨れあがったライワイ、ライワングの集合住宅地帯は、破壊行為、子供によるガソリン抜き取り、アルコール中毒、ギャング活動、警察通報者への脅迫などが日常茶飯となり、空き地にはゴミが散乱するなどコミュニティ意識欠如の甚だしい地域であると報告されることとなり(Walsh [1984] p.189)、劣悪な住環境と住民モラルの低下した生活困窮者の巢喰う犯罪多発地区の代表格とみなされるようになってしまったのである。

3. 住宅公社プログラムの評価

1960年代以降のスヴァ周辺都市化に対する住宅公社の影響は極めて大きかった。住宅公社は、1987年までに延べ8300軒の住宅を建設し、7000件の貸し付け事業を行い、1800軒の賃貸事業を行っている。そして1986年までには1万7000世帯、都市住民の約34%が、住宅公社による何らかのプログラムを

受けているのである。住宅公社のプログラムは恒久的な生活基盤を求める多くの都市住民に利用された。住宅公社はスヴァの住環境整備の主要な担い手であったといっても過言ではないだろう。スヴァ周辺には次々と住宅地が整備され、都市住民たちは合法的な持ち家を取得していった。40年間に及ぶ住宅公社の事業活動は、フィジー系、インド系を問わず、都市生活者たちに都市空間での安定した生活基盤を供給したという点で評価できよう。

しかし同時に様々な負の影響ももたらした。すでに述べたように、厳しい融資条件を満たすためには、結局低所得者層とはいっても比較的生活の安定した暮らしを営んでいることが条件となり、若年世帯、核家族、新規流入者、失業者や臨時雇い、母子世帯、家庭崩壊者、高齢者などへの効果的な住宅供給は行われなかった。低所得者層向けといいながらも、住宅公社のプログラムは、現実的には都市不法占拠集落そのものの解消にはあまり寄与せず、現在に至るもこうした集落は依然として市内各地に点在したままになっているのである。都市の不法占拠住宅は依然として増え続け、1976年国勢調査では、スヴァ全体の人口増加の2倍の勢いで不法占拠地区に住む貧困層が増加していることが明らかになっている⁽⁵⁾。

厳しい融資条件とは裏腹に、貸し付けにはしばしば情実が絡んで返済能力以上のローンが組まれたうえ、利子は決して安いとはいえず、返済に窮するケースも続出した。ウォルシュは地元紙を引用しつつ、1978年には2000件、全体件数の約60%の融資が返済不能状態に陥っており、エンゲル係数が50%に達する低所得者層にとって、収入の25%の返済は過重であると批判している (Walsh [1984] pp.188-189)。こうした状況は現在でも変わっておらず、筆者が1997年に調査したあるケースでは、現在の家を建てるために組んだローンが2万1000フィジードル (2000年8月現在1フィジードル=約50円強) で、年利は11.5%。したがって返済額は金利だけでも年間2415フィジードルになり、一方唯一の働き手である世帯主の賃金が2週間で約350~400フィジードルほどで、この中から120フィジードルをローンの返済に充てている。共済年金や所得税などを引かれると手元に残るのは210フィジードルほどで、こ

れで一家6人の生活をやりくりするのは極めて苦しく、それでも元本の返済額は年間500フィジードルほどにしかならず、「いくら払っても借金は減らない」(本人談)状態となっている。1999年に労働党を中心とするチョードリー政権が成立してまず手がけた施策の一つが、住宅ローンの利子の軽減であったことも、こうした事情を背景としたものである。

また当初住宅公社の用意した家は、建設に要した経費をそのまま購入者に転嫁するシステムだったため、低所得者向けと銘打った割には極めて高額なものであった。その後住宅公社は独自に低価格モデル住宅を開発するとともに改革を進め、1989年にそれまで建設した賃貸住宅に関する事業を公共賃貸機構(Public Rental Board)に移管して、現在では住宅用地の取得・造成・リースと、低コスト住宅の供給、そして住宅関連ローンをその事業の中心としているが、いずれにせよ過重な負担を抱えた借金生活を余儀なくされる人々を多数出現させてしまったことは否めない。そして借金によって定住生活基盤を供給したことは、逆説的に言えば彼らを将来にわたって都市に縛りつけることにもなった。

もう一つ見逃すことができないのは、住宅公社がそれまでの集団移住方式ではなく、世帯単位での住宅取得プログラムを打ち出し、出身地や民族グループの生活スタイルへの配慮を行わなかったことである。住宅公社が当初開発したモデル住宅は、民族グループごとの生活習慣を省みない画一的な構造だったため、開放的で大部屋を好むフィジー系と、小さくてもプライバシーが保てる個室の存在を求めるインド系の嗜好の差を無視しているとの不満が頻発した。と同時にこうした生活習慣への配慮を欠いたマニュアル通りの画一的な住宅政策は、とりわけフィジー系都市住民の生活形態を大きく変化させることになった。

住宅公社が用意した新しい造成地では、地縁や血縁による集落形成とは全く異なる形で、出身地や民族グループに関わらない住宅地が都市周辺に次々に形成されていった。そこには地域で指導者を戴いたり、自治組織を形成するための共通の基盤は存在しなかった。出身地の伝統的共同体との絆は日常

生活の中で相対的に弱まり、都市型の混住社会は居住地域内部での相互扶助関係を喪失させていったのである。

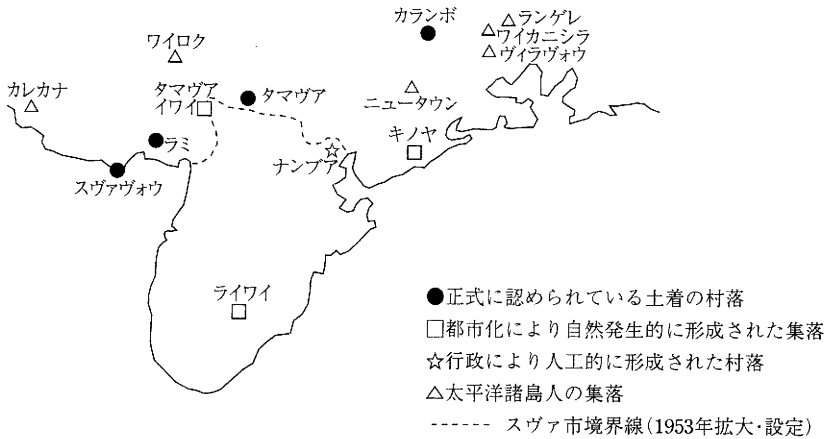
筆者が現地調査した際にも、都市部に住み酋長家系で軍の将校でもある男性から、ある日の夕方仕事から帰ってみると、カギが破られて居間にあった電化製品が盗難にあっていたという話を聞いた。また生まれてから30年以上都市部の同じ土地に暮らし、隣近所は皆顔見知りだという別の男性は、ある日昼寝から目を覚ますと、窓の外に財布を盗もうと手を伸ばす男の姿を見たと言った。いずれも住宅公社のプログラムを利用して持ち家を取得したフィジー系住民の話だが、ここで明らかなことは、フィジー系社会の伝統的権威や居住地域を基礎とする共同体意識はもはや都市空間においては希薄化しているということである。1960年代以降に住宅公社の行ったプログラムは、そしてそれを選択することは、フィジー系住民にとって、出身地別に形成していた疑似村落的集団からの決別であり、世帯を単位として都市という貨幣経済の支配する空間に船出することを意味していた。そしてそれはまた、彼らが「個」の集団へと解体してゆく過程でもあったのである。

4. フィジー系都市住民の生き残り戦略

今日スヴァおよびその周辺において、地域社会を束ねる本来の機能を有する伝統的な酋長はごく一部の集落を除いて存在していない。地区によっては、「このあたりはレワ出身者が多い」、「この近所にはラウ出身者が多い」、といった出身地域の偏在性のあるところもあるが、「地域のボス」はほとんど存在していないといっている。強固な地域共同体の存在は、もはやフィジー系都市住民にとって失われた過去の存在でしかない。開放的な家屋形態を伝統とするフィジー系においては、濃密な近所づきあいは都市部においても存在するが、それが生活扶助を伴う関係に至るケースは希である。

他方、こうした存立基盤の希薄なフィジー系都市住民たちが今もなお重要視するのは、出身地域によるアイデンティティの確保と、そしてとりわけ血

図4 スヴァ周辺にフィジー系と太平洋諸島出身者の集落(1960年ごろ)



(出所) Whitelaw [1966] p.166.

族集団による相互扶助システムである。フィジー系住民たちは、今なお親族の冠婚葬祭は極めて重視しており、また普段遠方に暮らしていても親族に対しては相互扶助関係にあるとの意識は強固である。フィジー系が農村から都市に移住する際、ひとまず身を寄せる先は、ほぼ例外なく親戚の家であり、都市部に住むフィジー系が休暇を取って向かう先の多くは親族の住む農村部である。

フィジー諸島においては、伝統的に土地を媒介とした相互扶助社会が成立しており、それは「マタンガリ」というリネージ(ないしはサブクラン)を、土地保有権を有する共同体として法的に登録し、すべてのフィジー系住民がいずれかのマタンガリに所属することによって、近代社会においてもこれを保持・強化してきた。フィジー系住民の出生登録書には、その両親氏名とともに、必ず所属するマタンガリ名が記載され、各人は、マタンガリの保有する土地に対する権利を持つことになる。すなわち親族関係は、共同体として法的にも保護されてきたのである。

世帯単位に分断された都市型居住環境の中で、フィジー系住民たちは新しい地域共同体を形成することはできなかったわけだが、それに反比例して、であるが故にこそ、出身地による連帯意識を維持させ、また血縁関係による相互扶助関係を強化させてきた。1961年にナヤザカロウが指摘した「血縁、出身地による紐帯がかえって強化されている」という点は、生き残り戦略として無意識的に選択された手段であり、社会保障制度なのであった。そして同時にナヤザカロウが指摘した都市型の間人関係の形成が、必ずしも相互扶助の強制力を持ち得ない中で、「血縁と出身地による紐帯」が、その後もフィジー系都市住民の中に刷り込まれていったのである。

第4節 都市住民社会の変容

1. スヴァへのフィジー系人口の集中と都市空間の膨張

さて、我々はここで、再度スヴァの人口動態に目を転じてみたい。表3は1946年以降のスヴァにおける民族集団別人口の推移だが、この表に見られるとおり、スヴァにおいては戦後一貫してフィジー系の方がインド系よりも高い人口増加率を示している。フィジー系村落住民の都市部への絶え間ない移動がその主要な要因であり、こうした移住者は伝統的にラウ諸島などの東部離島群やカンダヴ島などの島嶼部、さらにはレワやタイレヴなどのヴィティレヴ島東部の村落からの出身者が多かった (Nayacakalou [1961] p.34, Ward [1965] p.105, Walsh [1977] p.2など)。しかし、1996年の国勢調査結果を見ると、国内で出生地と居住地を異にする者 (=国内移住者) のうちで、移住先がスヴァ (ラミを含む) である者は、フィジー系移住者全体の実に61.7%に達しており、また全国各地からまんべんなく人が集まっていることがわかる。これに対してインド系では西部や北部の「シュガータウン」を目指す者も多く、スヴァへの移住者は移住者全体の28.2%に過ぎない。そして

表3 スヴァの民族グループ別人口(1946~1996年)

(単位:人,%)

	1946年	1956年	1966年	1976年	1986年	1996年
フィジー系	6,406	9,758	28,582	48,303	70,261	100,118
10年間の増加率	84.6	52.3	192.9	69.0	45.5	42.5
インド系	12,729	19,321	41,233	53,191	69,701	66,611
10年間の増加率	62.8	51.8	113.4	29.0	31.0	-4.4
その他	6,274	8,292	10,454	16,335	18,018	20,174
10年間の増加率	48.3	32.2	26.1	56.3	10.3	12.0
スヴァ人口合計	25,409	37,371	80,269	117,829	157,980	186,903
10年間の増加率	63.7	47.1	114.8	46.8	34.1	18.3
都市部の総人口	39,527	63,309	159,259	218,495	277,025	359,495
10年間の増加率	97.7	60.2	151.6	37.2	26.8	29.8
フィジー諸島の総人口	259,638	345,737	476,727	588,068	715,375	775,077
10年間の増加率	30.9	33.2	37.9	23.4	21.6	8.3

(注) 1) 1986年以降の数字は、センサス統計上分離されたラミを加えている。

2) 1966年の各民族グループの数値は推計値である。

(出所) Whitelaw [1966], Bloomfield [1967], Bureau of Statistics [1998a] より筆者作成。

フィジー系のスヴァへの人口集中傾向は調査の直近5年に限っても依然として強く、1996年にスヴァに住む5歳以上のフィジー系住民のうち、5年前には村落部に住んでいた者は19.8%、言い換えればスヴァに住むフィジー系住民の5人に1人はこの5年の間に村落部から移住してきた者なのである⁽⁶⁾。

こうして拡大を続けてきたスヴァのフィジー系人口は、1986年に絶対数でインド系を上回り、1996年にはその差がついに3万3507人にまで拡大した。インド系人口は、周知のように1987年に起きた2度にわたるクーデターと、それに続く露骨な民族差別的風潮を嫌って海外流出しており、1987年以降一貫して減少を続けている。出入国管理統計から計算すると、1987年から1996年の10年間でフィジー諸島から5万9876人のインド系国民が海外に脱出しており、その多くは都市に住む比較的富裕なホワイトカラー層や熟練労働者たちであった。そしてこれに伴って彼らの持ち家の多くが売りに出され、そこにフィジー系住民が移動してくるという構造になっている⁽⁷⁾。インド系住民の海外への人口流出は、2000年5月の文民クーデター事件以降、民族差別が

再び公然化しつつあることによってさらに増加するであろうし、他方フィジー系住民がスヴァへ移住することを抑制する政治的、経済的、そして社会的予兆は今のところ見受けられない。

ところで先に表1にも示したとおり、フィジー諸島では首都スヴァのみならず、国内の各都市で人口が増え続けているが、これには人口の流入や自然増によるもののほかに、もう一つ、都市空間そのものの膨張という理由もあることを付記しておきたい。たとえば、1996年国勢調査においては、ナンディ、サヴサヴ、シガトカ、ナウソリなどの各都市で、都市周縁部の統計処理上の境界線が変更された。こうした修正は、原則として各国勢調査に先だって都市部として取り扱う地域の境界線の見直しが行われることで為されるものだが、これはスヴァのみならず国内の各都市が、空間的にも拡大を続けていることを示している。スヴァに関してみると、ナウソリに向けた周縁部の人口が急増しており、国勢調査報告書では、早晚ナウソリ一帯も大スヴァ圏の中に入れて考えなければならなくなるだろうとの見通しを示している (Bureau of Statistics [1998b] pp.137-138)。人口移動と同時に、都市空間そのものの膨張もまた、都市人口の拡大を促しているのである。

2. 貧困問題の深刻化

都市生活を選択するということは、貨幣経済社会の中にその身を置くということであり、都市定住者の間にはやがて必然的に貧富の差が生じることになる。1997年に刊行された *Fiji Poverty Report* では、1977年と1991年に実施された調査をもとに、1991年には1970年代後半に比べて都市部、農村部ともにその内部での収入格差が拡大しており、それは特に都市部において顕著であると指摘している (Government of Fiji & UNDP [1997] pp.2, 23-24, 27)。

このことはまた、雇用問題の移り変わりからも考察することができる。独立直後の1970年代前半には、公的部門の拡大、国内市場の発展、観光業の発展をテコにした経済成長は急であり、その結果都市雇用は増加し、収入の均

等化も進んだ (Stavenuiter [1983] p.13)。また、1970年代から1980年代の初めにかけては、農村部において小規模農園が発達し、これが農村部での現金収入機会を拡大するとともに、そこでの労働需要が現金収入目的の潜在的都市移住者のオルタナティブとして存在していた。その結果、少なくとも1982年までは、都市・農村間の人口移動は、都市部での労働市場の伸びに均衡しており、都市失業者の公然化をある程度阻止する要因となっていた (Ellis [1983])。この当時はまだ「都市で困窮しても農村に戻れば生きていくことはできる」、という太平洋諸島でよく語られるモデルが説得力を持っていた時代でもあった。

しかしながら1980年代以降、経済の停滞、投資の沈滞化が徐々に雇用面へも影響を見せ始め、都市における新規雇用機会は減少し、同時に非熟練未組織労働者の賃金は急速に下落した。同時に収入格差が特に組合労働者と非組合労働者の間で、また農業労働者と非農業労働者との間で拡大していった。雇用は1982~94年で年平均2.8%増加しているが、労働人口はこれを上回る3.5%の増加を示しており、好条件での新規就業は次第に困難になってきた (Government of Fiji & UNDP [1997] pp.43-44)。1999年に行われた総選挙で、すべての有力政党が雇用確保を公約に掲げていたことからわかるように、今や青年層の就職難、失業問題は、国の抱える主要な問題のひとつである。

こうして生じた恒常的な失業問題は、都市部の貧困世帯数を押し上げている。前掲 *Fiji Poverty Report* では、都市部の貧困世帯の割合は1977年の12%から1990~91年には30%に達しているとし、フィジー系都市住民に限ってみても27.7%、4世帯に1世帯が貧困ライン以下であると指摘している (Government of Fiji & UNDP [1997] pp.34, 41)。そしてフィジー系住民にとって貧困問題は、国のおかれた経済状況とともに、都市住民の生活形態の変化とも密接に関係しているのである。

3. 都市出生者の増加と出自村落との関係

さて、フィジー系住民が都市部に移住を始めて数十年の時代が流れる中で、都市に移り住んだ者は親から子、子から孫へと世代交代を繰り返している。特に近年の都市生まれ世代の台頭は顕著であり、現在では彼らが都市住民の中核を占めるようになってきている。

1976年のスヴァにおける都市生まれの人口比率はわずか23%に過ぎなかった。これに対して1996年の国勢調査では、スヴァに住むフィジー系住民のうち、都市生まれの割合は58.8%で約5万人となっている。都市生まれの割合は、フィジー諸島の都市住民全体でみても59.5%でスヴァの数字とほとんど差はなく、1996年時点でのフィジー系都市住民のうち、この5年以内に移住してきた新規流入者が2割、それ以前に移住してきた者が2割で、残りの6割が都市生まれという状況になっている。ここからわかることは、この20年間で急速に都市生まれの層が拡大し、二世から、三世、四世へと世代交代が進んでいるということである。出生時から村落社会と異なる生活環境にある彼らは、当然共同体に対する意識を含めたアイデンティティの持ち方も、従来のフィジー系国民とは異なっていよう。

筆者は1993年から3年間スヴァに住んでいたが、その際フィジー系の30代の夫婦一家と同居していた。彼らのもとへはたびたび訪問者が訪れたが、夫（都市生まれ）の親戚で彼のもとを訪ねるのは、ともに都市部で育った親族のみであり、出身村落からやってくる者は皆無であった。彼は自らが出身地と主張する村、すなわち彼が土地の権利を有している村の従兄弟たちとの人間関係は決して切れていないと語っていたが、では果たしてその子供たちの代になるとどうなるのか。兄弟や、日常接している従兄弟たちとの関係は続くだろうが、血縁関係も交流も薄くなった村落に住むほとんど面識のない親戚たちとの間に、同じ共同体構成員としての相互扶助関係が成立しうるだろうか。そしてその次の世代ではどうか。

また村落出身で、苦労して大企業の幹部に上りつめたある40代後半のフィジー系の男性は、筆者に対して結婚後妻子を故郷の村に連れていったことは一度もないと語り、その理由として地理的な問題とともに、村に帰るときには村一番の成功者として莫大な土産を持ち帰らねばならず、自分は帰郷にそれほど価値を感じていないと説明していた。彼の家には時折故郷から農作物が送られ、彼の方からも多少の経済的支援を村や村の親族に対して行っているが、彼の子の代になったときに果たして出自村落との関係が維持されてゆくのかは大いに疑問の残るところである。

もちろんこうした諸例には個人差があり、村落との紐帯の維持への積極性には、各人のおかれた環境や利害も関係するであろう。頻繁に出自村落との間を往来する親を持つ者は、そうでない者に比べて出自村落との紐帯が強かることは当然である。しかしそもそも社会システムは社会的必要性によって成立し維持される以上、都市住民が村落社会とは異なる空間に生活基盤を確立したならば、出自村落と従前通りの関係を保ってゆく必然性は見いだせないのである。

フィジー系都市住民の多くは、今なお出身地に対する思い入れが強い。しかしメラネシア全般に見られる「ワントク」とは異なり、そこに運命共同体的な要素は希薄である。諸個人が単に場を共有しているに過ぎない都市という空間において、他者との繋がりを見いだす手段として「同郷」という結節点は有効ではあるが、それは極めて観念的に維持されているに過ぎないのではなかろうか。

4. 都市貧困層の再生産と親族共同体からの疎外

前掲 *Fiji Poverty Report* では、低所得世帯に多い世帯構成として、老人世帯、女性世帯などとともに、親族からの十分な援助が受けられない既婚男性の世帯を挙げ、世帯規模が小さく、収入源を一人かせいぜい二人の成人に頼っている世帯をその典型としている。そしてまた同書では、経済的な理由

で子供の約30%が小学校を中退するか中等学校への進学を断念することを余儀なくされていると述べている (Government of Fiji & UNDP [1997] pp.2-4)。こうした事実は、都市貧困層が徐々に固定化され、再生産され始めている現状を示しているといえる。

都市の少なからぬ貧困家庭では、次世代への満足な教育を与えることができず、したがってその子らが好条件で職に就くことは極めて困難である。また世帯内あるいは親族内の計らいで雇用機会を得ることも多くの場合望めない。出自村落からの実質的な支援が世代交代につれて希薄になる中で、世帯規模の小さな貧困家庭は数少ない成人構成員に家計を支える存在としての負担を増加させる。こうした事情によって青年期以降の構成員は、親族の相互扶助システムは非常時 (収入を失った場合または逆に収入に余裕のできた場合) に活用するにとどめ、無制限の権利義務関係を伴うことのない個人的なネットワークを活用して生活の基盤を形成する戦略を採るようになる。その結果構える世帯は再び核家族かそれに準じるものとなり、次の世代でもまた同じことが繰り返されることになる。

もちろん現状において大多数のフィジー系都市住民はその家族関係を固く保持し、血縁者間の相互扶助関係は依然として強固である。しかし、観念的に「村落共同体」、「親族集団」といった伝統的な紐帯を維持しながらも、都市住民たちの間にそれを維持するだけの基盤と必然性が徐々に失われつつある今、こうした紐帯もまた徐々に薄まってゆくのではあるまいか。

筆者は本研究の中間報告において、都市における世代交代の進行によって、フィジー系住民が集団の一員から個としての存在に解体されつつある事例を呈示しつつ、都市の低所得者世帯においては出自村落との関係希薄化とともに、親族間の関係すら崩壊するケースも出現していることを指摘した (小川 [1999]) が、こうした事例はまさにこの連環の一つの所産であろう。

まとめにかえて：伝統的相互扶助社会終焉の萌芽

伝統的な相互扶助システムは、構成員相互間の社会保障制度とも捉えることができる。かつては運命共同体的な地縁・血縁集団に基づいていたこうした伝統的社会システムは、都市移住開始当初も出身地をベースにした集落を形成し、疑似村落システムを採用することで、村落を離れた人々にも日常的に自らの出自を自覚させ、出自社会への忠誠心を維持させてきた。と同時に、はじめて都市という環境に飛び込んできた者にとって、伝統的な村落共同体の飛び地を都市内部に形成することは、自らが都市で生きのびてゆくために必要な安全装置であり保険であった。そこには依然として伝統的共同体に社会的必然性が存在し、それを維持する素地が残されていたのである。

都市に生活基盤が確立し、周囲に共同体構成員の存在しない住環境に半ば人為的に身を委ねるようになると、伝統的な相互扶助システムとの日常的な接点は相対的に低下し、フィジー系都市住民は徐々にその経済基盤を世帯単位とする方向にシフトし始めた。他方、都市内部では職場や教会、組合といった日常的な接点を持つ新たな集団が形成されていったが、こうした集団に生活の保障を望むことは不可能であった。そのため、各世帯は自らの生き残り戦略として、郷里や親族との紐帯の温存を図った。土地保有制度によって法的にも出自村落との繋がりは確立されており、しかも村落から移り住んできた世代にとっては、こうした伝統的システムは子供の頃から刷り込まれてきた常識であり、村落には幼い頃から苦楽を共にした大勢の親戚や仲間がいた。したがって冠婚葬祭に代表される折々の出自村落との人や物の交流によって、出自村落との紐帯を維持することは、決して無理なことではなかった。

しかしながら出自村落との時間的、空間的乖離は、やがて実質的な相互扶助関係を希薄化させてゆく。そればかりか、親族集団の相互扶助関係からも遠ざかりつつある人々も出現してきている。都市化の進展は、これまでフィジー系社会を特徴づけてきた旧来の伝統的な互酬社会を確実に変化させてい

る。そして共同社会の幻想と現実の暮らしの実態の間で、都市で生まれた新世代は非常に不安定な存在になっている。フィジー系住民の出身地や親族を基礎としたアイデンティティと経済的紐帯が、果たして世代が代わる中で今後も維持されてゆくのか、あるいはどのようなオルタナティブな関係を構築してゆくのか。それは都市に生まれた者たちに与えられた課題なのである。

〔注〕—————

- (1) ただし、スヴァには半島の西側に一つ村落があり、彼らはこの過程で移住を強いられている（現在のスヴァヴォウ村）。彼らに対しては賠償金が支払われたものの、スヴァヴォウ村住民は、ザコンバウにはスヴァ半島の土地を売却する権利はなかったとして、現在もこの問題の解決を政府に訴えている。なおフィジーの土地制度については、Ward [1965] pp.115-139参照。
- (2) CSRの事業は、独立後の1973年に政府が土地、施設などを買い取り、国営のFiji Sugar Corporation (FSC) に受け継がれて現在に至っている。
- (3) ロトゥマ系 (Rotuman) は、ヴィティレヴ島の北約500キロメートルのところにあるロトゥマ島出身者のこと。住民はポリネシア民族で、1881年にフィジー諸島に編入された。
- (4) 賃金労働者としてニューヘブリデス諸島 (ヴァヌアツ)、ギルバート諸島 (キリバス)、エリス諸島 (ツバル)、ソロモン諸島などから連れてこられた人々で、初期段階ではポリネシア人が主だったものの、1870年代までにはその多くはメラネシア人となっていた。しかし当時は彼らを一括して「ポリネシア人」とカテゴライズしていた (Donnelly, Quanchi and Kerr [1994] p.33)。
- (5) 政府とUNDPは、1996年段階で1万4200世帯、都市部のおよそ20%がインフォーマル・ハウジングに住んでいると推定している (Government of Fiji & UNDP [1997] p.35)。都市貧困層の問題についてはBryant [1993]、また都市部の社会問題全般に関しては、Griffin and Monsell-Davis ed. [1986] に詳しい。
- (6) フィジーの国内人口移動については、Bureau of Statistics [1998a] および [1998b] に国勢調査結果が示されている。本文中の数字はそこに示されているものだが、この問題を厳密に検討するためには、農村間移動、都市間移動、都市から農村への移動など、より詳細な人口動態の数字が必要である。残念ながら上記資料にはこれらについて算出するためのデータの掲載がされていない。しかし国勢調査項目を検討すると、これらのデータは統計局内部に存在しているはずであり、この資料入手と分析は今後の検討課題としたい。
- (7) たとえば、1999年に筆者が現地聞き取り調査した際にキノヤ地区 (住宅公社

が初期に宅地造成した地域)に住む住民たちに聞き取り調査を行ったところ、同地区に住むインド系住民がこの10年間でめっきり減ったと口を揃えていた。

〔参考文献〕

〈日本語文献〉

- 小川和美 [1999] 「フィジー都市定住民の伝統的相互扶助システムからの乖離—あるフィジー人一家の生活誌から—」(塩田光喜編『太平洋島嶼諸国の都市化』アジア経済研究所)。
- 春日直樹 [1994] 「『土地の民』からみた国家の形成と変容—フィジーのマタニトゥ概念を中心に—」(熊谷圭知・塩田光喜編『マタンギ・パシフィカ』アジア経済研究所)。
- 塩田光喜 [1997] 「水平線の彼方から—西洋近代文明の太平洋進出と太平洋島嶼王国の興亡—」(塩田光喜編『海洋島嶼国家の原像と変貌』アジア経済研究所)。

〈外国語文献〉

- Ali, A. [1980] *Plantation to Politics: Studies on Fiji Indians*, Suva: University of the South Pacific.
- Bakker, M. L. and A. C. Walsh [1976] *Urban Fiji: Boundaries Used in the 1976 Census of Population* (A report to the Census Commissioner), Suva: typescript.
- Bloomfield, G. T. [1967] *Boundaries of Towns and Urban Areas in Fiji 1966* (A report to the Census Commissioner, Fiji), Auckland: Department of Geography, University of Auckland.
- Bryant, J. J. [1993] *Urban Poverty and the Environment in the South Pacific*, Armidale: The Department of Geography and Planning, University of New England.
- Bureau of Statistics [1998a] *1996 Fiji Census of Population and Housing: General Tables* (Parliament of Fiji, Parliament Paper No.43 of 1998), Suva: Bureau of Statistics.
- [1998b] *1996 Fiji Census of Population and Housing: Analytical Report* (Parliament of Fiji, Parliament Paper No.49 of 1998), Suva: Bureau of Statistics.
- [1999] *Current Economic Statistics: April 1999*, Suva: Bureau of Statistics.

tics.

- Chandra, R. [1980] "Rural-Urban Migration in Fiji, 1966-1976", typescript (presented to the 1980 Development Studies Conference Population Mobility and Development).
- [1996] "Urbanization in Fiji, 1976-1986," *The Journal of Pacific Studies*, Vol.19.
- Colony of Fiji [1936] *A Report on the 1936 Census*, Suva: Colony of Fiji.
- [1960] *Report of the Commission of Enquiry into the Natural Resources and Population Trends of the Colony of Fiji 1959* (Legislative Council of Fiji, Council Paper No.1 of 1960), Suva: The Crown Agents for Oversea Governments and Administrations on behalf of The Government of Fiji.
- Derrick, R. A. [1938] *The Geography of the Fiji Islands: Historical, Physical, and Political*, Davuilevu: Davuilevu Technical School.
- [1946] *A History of Fiji*, Suva: Government Press.
- Donnelly, T. A., M. Quanchi and G. J. A. Kerr [1994] *Fiji in the Pacific*, 4th edition, Milton: Jacaranda Press.
- Ellis, F. [1983] "An overview of employment in Agriculture, forestry and fisheries: past trends and current policy issue," Fiji Employment Development Mission (unpublished working paper WE14/FEM/FE).
- Government of Fiji [1974] *Population of Fiji: Monograph for the United Nations World Population Year 1974*, Suva: Government of Fiji.
- Government of Fiji and UNDP [1997] *Fiji Poverty Report*, Suva: Government of Fiji & UNDP
- Gravelle, K. [1979] *Fiji's Times: A History of Fiji*, Suva: Fiji Times.
- Griffin, C. and M. Monsell-Davis eds. [1986] *Fijians in Town*, Suva: Institute of Pacific Studies, University of the South Pacific.
- Housing Authority of Fiji [1998] *Vale Newsletter*, June 1998.
- [1999a] "Company Profile" (unpublished), Suva: Housing Authority of Fiji.
- [1999b] *Housing Authority Estates*, Suva: Housing Authority of Fiji.
- Kiste, R. C. [1998] *He Served: A Biography of Macu Salato*, Suva: Institute of Pacific Studies, University of the South Pacific.
- Nayacakalou, R. R. [1961] "The Urban Fijians of Suva," typescript (A report presented at the 10th Pacific Science Congress of the Pacific Science Association held at University of Hawaii).
- [1978] *Tradition and Change in the Fijian Village*, Suva: South Pacific Sciences Association in association with the Institute of Pacific Studies,

- University of the South Pacific.
- Schutz, A. J. [1978] *Suva: A History and Guide*, Sydney: Pacific Publications.
- Stavenhuter, S. [1983] *Income Distribution in Fiji: An Analysis of Its Various Dimensions, With Implications For Future Employment, Basic Needs and Income Policies* (WEP Research Working Paper), Geneva: ILO.
- Suva City Library [1997] "City of Suva," typescript.
- Tudor, J. ed. [1968] *Handbook of Fiji*, 3rd edition, Sydney: Pacific Publication.
- Vakatora, T. R. [1998] *From the Mangrove Swamps*, Suva (Published by Author).
- Walsh, A. C. [1976] "The Ethnic Variable in the Urbanization of Fiji," L.A. Kosinski and J. W. Wabb eds., *Population at Microscale: Commission on Population Geography*, Hamilton: International Geographical Union and New Zealand Geographical Society.
- [1977] "Urbanization in Fiji," *Perspective*, No.14.
- [1978] "The Urban Squatter Question: Squatting, Housing and Urbanization in Suva, Fiji" (unpublished Ph.D. thesis), Palmerston North: Department of Geography, Massey University.
- [1984] "The Search for an Appropriate Housing Policy in Fiji," *Third World Planning Review*, Vol.6, No.2.
- Ward, R. G. [1965] *Land Use and Population in Fiji: A Geographical Study*, Suva: Her Majesty's Stationery Office.
- Whitelaw, J. S. [1966] "People, Land and Government in Suva, Fiji," typescript (A report submitted to the ANU).